

大学院生がみたコロナ禍のレファレンスサービス ー沖縄関係資料を求めて

仲宗根あゆみ・宮里初枝

はじめに

独特な歴史・文化を背景とする沖縄の図書館にとって、地域資料(郷土資料)、または「沖縄関係資料」の収集が重要であるということはよく指摘される。しかし、収集の必要性とは別に、専門的な資料を活用したレファレンスサービスの実態を「利用者」の視点から伝えるレポートは少ない印象もある。

沖縄関係資料は実際の図書館サービスの中でどのように生かされているのか。利用者からみて、そこに何らかの課題はないだろうか。そして、2020年から続く「コロナ禍」において、図書館の研究支援機能はどのような状態にあったのだろうか。

本稿では、「沖縄」を専門で学ぶ大学院生がコロナ禍の県内図書館において研究に必要な専門資料の調査を行う中でみえてきた実態を報告するとともに、その課題を考察したい。

1. キリスト教関係資料の調査

報告者(仲宗根)は、沖縄国際大学大学院南島文化専攻言語文化領域にて、2020~2021年度まで「曾野綾子『切りとられた時間』論ー沖縄戦とキリスト教の表象をめぐってー」と題する研究活動を行った。研究(修士論文)の概要は次の通りである。

曾野綾子には、1969年から1971年の間に沖縄戦を題材とした作品が三つあるが、本論では「ある神話の背景」と「切りとられた時間」の二作品を中心に考察を行った。これらはほぼ同

時期に書かれ、ともに渡嘉敷の「集団自決」を題材にしたものだが、前者は「ノンフィクション」、後者は小説という形式の違いがある。特に「切り取られた時間」は、キリスト教的な表現や隠喩が作品を難解にしているため先行研究は少ない。本研究においては、沖縄戦や戦後の沖縄のキリスト教史などの歴史的背景をふまえ、「切り取られた時間」に描かれた「釣師」「女」「(集団自決)当事者」「神父」の表象について、これまでの先行研究でほとんど触れられることのなかったキリスト教的な視点から、曾野テキストを批判的に分析・考察することを目的・意義とした。

さらに、第3章では「ある神話の背景」の異同調査を行い、「テキストからを排除されたもの」について考察した。第4章は「ある神話」の重要な証言者の一人であり、「集団自決」の当事者でもある金城重明牧師の信仰告白をめぐって考察した。曾野は教科書裁判においても、金城牧師の「聖書解釈」を「誤り」として指摘したが、ここには沖縄戦をめぐる「記憶の闘争」の問題が横たわっていると考えられる。

本研究においては、「切り取られた時間」を単一のテキスト論としてではなく、同時代や過去もふくめた時間や空間の広がりの中に置き直し、複数の文脈の中で再読した。

1.1. 修士論文に必要な文献とその調査過程

修士論文を執筆する上で、特に必要性を感じ

ていたのは「平和をつくる沖縄キリスト者の会」に関する情報であった。

「ある神話の背景」には、渡嘉敷島住民の集団自決命令を出したとされる、赤松嘉次元大尉が戦後はじめて沖縄を訪れた時の場面が記されている。到着後、来県に反対する複数の団体によって抗議行動が起こるが、その中に「平和をつくるキリスト者の会」（以下、「会」と記す）が参加している。筆者は、曾野がこのような「会」の抗議活動に批判的であり、そのことが「ある神話の背景」「切りとられた時間」の創作につながっていったのではないかという仮説を持っている。ここでもし、「会」について知ることができれば、沖縄のキリスト者たちが「集団自決」に対してどのような考えをもっているのか、さらに当事者金城重明牧師との関係についても知ることができるだろうと考えたのである。

だが、この時点(2021年9月時点)では、「赤松来県」についての新聞記事を探しただけで、「会」自体の活動や性格についての探索は全く進んでいなかった。

そこで、まずは、「会」についての情報を集めることから始めた。キリスト教関係資料を多く所蔵している沖縄キリスト教学院大学図書館に、まずはメールで問い合わせを行い、以下の資料の探索をお願いした。

- ①小林紀由「キリスト教的平和運動について—『平和をつくる沖縄キリスト者の会』の事例研究より」『人間学紀要』31、2001年12月。
- ②『資料集 1968年12月～1970年3月』平和をつくる沖縄キリスト者の会発行。

これらの資料によって、「会」と沖縄キリスト教学院大学の関係や、「会」の概要や活動について、知ることができた。しかも、②『資料集』は私家版で、沖縄キリスト教学院大学図書館しか所蔵していない貴重な資料であった。

だが、残念なことに、目的としている、赤松元大尉来県の抗議に関する情報は得られなかった。また、『資料集』がカバーしている期間は1970年2月ごろまでであるため、それ以降の活動内容について資料を集める必要が新たに生じた。

そこで、沖縄県立図書館と沖縄国際大学図書館の両図書館にレファレンスを依頼した。

ただし、コロナ禍の影響によって、対面でのレファレンスについては時間的な制限があると事前に聞いていたため、まずはレファレンス内容をメールで送信し、その後改めて来館の上、口頭にて相談するという方法をとった。

1.2. レファレンスサービス利用の概要

報告者は以下の日程でレファレンスサービスを利用した。

- 沖縄県立図書館：2021年10月14日（木）13時15分～13時30分（約15分）
※メールレファレンス：10月8日送信、10月27日メールにて回答。
- 沖縄国際大学図書館：2021年10月21日（木）13時15分～13時45分（約30分）
※メールレファレンス：10月15日送信、10月21日、口頭にて回答。

レファレンス質問の具体的な内容は以下のとおり。

- ① 赤松来県時の「平和をつくる沖縄キリスト者の会」の抗議活動について知ることができる資料(新聞記事や雑誌記事も含む)
- ② 「平和をつくる沖縄キリスト者の会」のその他の活動について(特に1970年以降)

以下に、レファレンスサービスの概要と成果について述べる。

(1) 沖縄県立図書館

対面レファレンスでいくつか資料を教えてください、正式な回答は、後日メールで頂いた。

まず、①については、『沖縄タイムス』『琉球新報』『沖縄グラフ』などから、当時の記事を丁寧に拾っていただいた。しかし、それらの記事はすべて、抗議団体の1つとして、「会」が含まれていたことを報じるくらいの内容であり、残念ながら、赤松来県に対する「会」の具体的な活動について知ることはできなかった。

次に、②については、沖縄キリスト教学院大学図書館と同様に、やはり、1970年以降の活動については知ることができなかった。ただし、以下の文献に「会」の活動についての記載、または周辺の情報があることを紹介してもらった。

- ・ 小林紀由『戦後沖縄キリスト教の諸相』エーアンドエー、1999年
- ・ 仲尾次清彦「わがハンストの記」『27度線の南から—沖縄キリスト者の証言』日本基督教団出版局、1971年
- ・ 大城実「戦後沖縄の教会の一面面」『戦さ場と廃墟の中から—戦中・戦後の沖縄に生きた人々—』日本キリスト教団沖縄教区、2004年 ほか

上記の資料については、すでに収集済みのものも多かったが、所在のみ確認していただけて、内容を調査していないものも含まれていた。①と同様、詳しい記述は確認できなかったが、レファレンスを担当する専門家が探しても、赤松来県時の「会」の抗議行動を示す資料や1970年以降の「会」の活動を伝える資料がほとんど存在しないということが明らかになったことは、研究を進める上で大きな成果となった。

次に、対面でのレファレンスサービスの結果について述べると、「会」の代表・大城実に関する資料のリストを頂いた。また、「会」の名称について、「表記の揺れ」がある可能性があるという助

言をいただいた。具体的には、「平和をつくる沖縄キリスト者の会」の他にも、「平和を作る」「キリスト教者の会」など、同じ団体を指していると思われる名称が複数存在することを教えていただいた。このことは、その後、報告者自身が新聞記事などのデータベースを検索する上でも、重要な指摘となった。

後日、今後の自身の情報検索に役立てるため、表記のゆらぎ以外に資料の探索方法において気を付けることはないか、訪問・メール両方にて尋ねてみたところ、明確な回答はいただけなかったが、非常に専門的で、わかりにくい内容の依頼にもかかわらず、丁寧に対応していただいたことに感謝している。

(2) 沖縄国際大学図書館

沖縄国際大学図書館に対しても、県立図書館と同様、メールにてレファレンス内容を事前に知らせ、後日、再度正式に相談するつもりだった。しかし、図書館に訪れた時にはすでに、調査が完了していたことには大変驚かされた。

調査結果については、沖縄県立図書館と同様、①赤松来県時の「会」の様子や、②1970年以降の活動については、具体的な情報を得ることはできなかった。しかし、研究を進める上で参考になりそうな周辺の資料について、県立図書館では発見できなかったものをいくつか教えていただいた。

- ・ 『戦さ場と廃墟の中から—戦中・戦後の沖縄に生きた人々—』日本キリスト教団沖縄教区、2004年
- ・ 「渡嘉敷島集団自決の責任者赤松の来県」「慰霊と戦争責任」『人民』422号、1970年4月4日、3・4面
- ・ 「戦争の傷痕—赤松元隊長への抗議」『沖縄年鑑』復刻版、12巻、日本図書センター、1972年、p237 ほか
- ・ 『公文書綴り 1970. 4. 1 政治経済部』

読谷村教育委員会所蔵(「沖縄戦後教育史・復帰関連資料」のデータベース)

特に、最後に挙げた読谷村教育委員会『公文書綴り 1970. 4. 1』の情報については、ネットで公開されている「沖縄戦後教育史・復帰関連資料」のデータベース¹において見つかったものであり、『公文書綴り 1970. 4. 1』の目次(下図)にある「戦争犯罪究明委員会」と「平和を作る沖縄キリスト者の会」の役員会開催について(通知)と「赤松元陸軍大尉の即時退島を要求する声明」については修士論文の執筆において重要な資料になると思われた。しかし、ウェブサイト上ではこの2つの文書は見ることができなかったため、早速、読谷村に電話で問い合わせて内容を確認することにした。



その結果、村の担当の方から、公文書綴りのデータをメールですぐに送付していただくことができ、内容を確認したところ、直接的には赤松来県と「会」の関係を示す資料ではなかったが、次のような興味深い情報を知ることができた。

赤松来県を機に沖縄教職員会の中に戦争犯罪究明委員会が設置され、同年9月4日、委員会と「会」の合同役員会が開催されたことが分かった。また、「赤松元陸軍大尉の即時退島を要求する声明」文も保管されており、当時の状況を

より深く知ることができた。これらの資料は、論文を書く上で、非常に役立った。

また、沖縄国際大学図書館にも、県立図書館と同様に、資料の探索方法について、メールでアドバイスを求めたところ、後日、丁寧な回答を頂いた。

沖縄国際大学図書館には1970年頃の新聞の所蔵がなかったため、赤松来県時の様子などを調べる上では、①Google 検索、②CiNii Articles 検索、③KAKEN 検索、④書架にて探索(まずは OPAC で関連書を検索。そして配架場所を確認した上で、参考図書・年鑑類、渡嘉敷村史、一般図書の順で探す)という4つの探索方法がとられたという。

筆者にとっては、特に①Googleを用いた検索方法が勉強になった。ポイントはまずは「様々なキーワードを組み合わせて検索」し、さらに、「得られた情報からさらに広げて検索する」ということだった。読谷村教育委員会もこうして辿り着いたのだという。このあたりは、レファレンス担当者としての熟練した技術が必要になるのかも知れないが、ぜひ今後の検索に役立てたい。

また、④は、図書館の基本的な探索方法だと思うが、かなり時間がかかる作業となるため、報告者はそれをほぼ行っていなかった。そのために、これまでに重要な情報を見逃していた可能性がある。今回のレファレンスサービスを通して、データベースでは検索できない関連資料を発見できた。今後はデータベースに頼るだけでなく、書架での探索も併せて行う必要があると感じた。

1.3. レファレンスサービスを利用した感想

以上、沖縄県立図書館、沖縄国際大学図書館、さらに、前述の沖縄キリスト教大学図書館を加えると、これまで三カ所のレファレンスサービスを利用した結果についてまとめてみた。

アクセス

¹ 読谷村教育委員会制作「沖縄戦後教育史・復帰関連資料」<http://yomitan-sengoshi.jp/>, 2022.1.31

全体を通して言えることは、レファレンスサービスから予想以上の成果が得られたということである。どの図書館においても、明確な答えは出せなくても、幅を広げ、周辺の近い情報を示して下さった。

これまで図書館を利用して来た中で、レファレンスサービスを利用したこともあったが、こちらの質問の仕方が悪かったらしく、明確な回答を得ることができず、いつの間にかサービスを利用しなくなっていた。だが、今回の調査では、質問内容を整理し、事前に相談内容を伝えたことが、よい結果につながったのだと考える。

ただし、現在はコロナ渦ということもあり、図書館利用が難しい状況にある。特に大学院入学当初は、県内の全図書館が事実上のロックダウン状況にあり、とても勉強や研究ができる状況にはなかった。無論、貸出サービスは郵送等で行われていたが、困ったのは、辞典などの参考図書や沖縄県史などの大型書籍の利用についてである。特に、複数の辞書や参考図書を手にとって引くことができないのには困った。大学院の講義の発表資料を作ることも難しかった。

だが、この一年間、講義を通して、図書館の目的や意義、機能や役割などについて学び、図書館を新たな目で見ることができたように思う。

特に、レファレンスサービスは、図書館業務の中でも本当に大変な仕事だと思う。沖縄国際大学図書館では、報告者が所属する大学ということもあってか、一つの質問に対し、数名で調査にあたると聞いた。また、中には、レファレンスの回答が終った後も、引き続き調査を続けて下さった。申し訳ないとは思ったが、非常にありがたかった。

以上が、レファレンスサービスについての報告であるが、最後に、率直な感想を述べたいと思う。

筆者はこれまで、大学に在籍していなければ研究を続けることができないと考えていたが、今回の講義を通して、どの図書館においても「知る権利」が保障されていることを知った。これまで、レ

ファレンスを利用することを何となく遠慮する気持ちがあったが、今後はありがたく利用させて頂こうと思った。

大学院修了後も、大学や地域の図書館を利用し、さらなる研究を進めていきたいと考えている。サービスを利用させていただいた、図書館の皆さま、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

2. 久志芙沙子関係資料の調査

報告者(宮里)は、沖縄国際大学大学院南島文化専攻言語文化領域にて、2020~2021年度まで「久志芙沙子研究—マイノリティー集団における女性の視点から」と題する研究活動を行った。研究の概要は次の通りである。

本研究では、久志芙沙子の作家としての芽をつんだ沖縄の「内なる差別意識」を批判的に検討するとともに、久志における複合的なアイデンティティ意識の形成について考察した。

久志芙沙子の「滅びゆく琉球女の手記」は、『婦人公論』1932年6月号に掲載された作品である。しかし、第一回目が掲載された後、東京県人会や京浜沖縄学生会からの抗議や近親者の反対により、やむなく連載は中断される。これに対し、久志芙沙子は翌7月号の『婦人公論』誌上に『釈明文』を発表したが、結局、この「筆禍事件」の後、芙沙子は断筆したとされる。

沖縄本島の旧家に生まれた久志は、結婚を機に台湾に移り住み、その後も東京、名古屋、東京と移動しながら、みずからの生活を築いていった。しかし、どの地にあっても、久志はつねに「永遠のよそもの」としてのアイデンティティ意識を持ち続けていたのではなかったか。本論文では、久志の83年の生涯を辿りながら、彼女が一人のジェンダー、エスニシティの越境者としていかに生き延び、自己形成していったかを考察した。

その他、本研究の主な成果は以下の通りである。①先行論文の整理、関係者への聞き書きやインタビュー等の基礎的研究を行い、生涯年譜の充実をはかった。②久志の初期作品である、

詩や短歌を新たに発見、紹介した。③「滅びゆく琉球女の手記」への序章ともいえる「入選実話年上の女・年下の男(『日記の抜き書き』『婦人公論』昭和6年5月号)の読解と考察をおこなった。④久志の死後発行された創作集『一期一会』の全作品に解題を付し、紹介をおこなった。⑤晩年の宗教法人「解脱会」の活動については今後の課題であるが、現在までに明らかになった事実関係をもとに若干の考察を加えた。

2.1. 修士論文に必要な文献とその調査過程

久志芙沙子の資料は少なく、これまでの研究者によって明らかになった資料は、ほとんど公開されている。久志芙沙子が作品を投稿していたとされる『女学世界』『婦人世界』の投稿欄は沖縄県立図書館を通じて、国立国会図書館からコピーを入手した。また、京浜沖縄学生会に関する資料としては、沖縄県立図書館所蔵の『南島』から記事を収集できた。また、芙沙子がエッセイを投稿した姫百合合同窓会の会誌『姫百合のかほり』についても沖縄県立図書館にてコピーを入手した。同じく、県立図書館で、芙沙子の夫である坂野光が発行した私家版の『一期一会』(芙沙子の創作集)もコピーを行うなどして収集した。

また、先行研究の一つである銘苅純一氏の修士論考の中で、『東京朝日新聞』(1932年5月15日、17日付)に「滅びゆく琉球女の手記」に関する新聞広告が掲載されていることを知ったため、『東京朝日新聞』の別日の広告や、他の新聞にも同様の広告がないかと考え、『婦人公論』1932年6月号が発売された時期の新聞縮刷版を沖縄国際大学図書館にて調査した。その結果、『東京朝日新聞』5月24日付の広告を新たに発見できた。また、同年、6月16日の記事の中に、同じく『婦人公論』の広告記事は確認することができ、釈明文の紹介が掲載されていることがわかった。

さらに、読売新聞の記事検索データベースについては、昭和初期の広告の検索も可能であったため、「婦人公論」をキーワードとして検索を

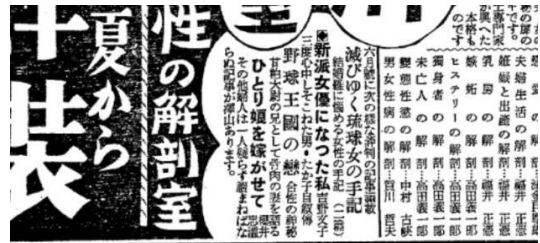
行ったところ、次に挙げるような広告を5点を見つけたことができた。また、「滅びゆく琉球女の手記」の広告以外にも、次号に掲載された釈明文に関する広告も2点発見できた。



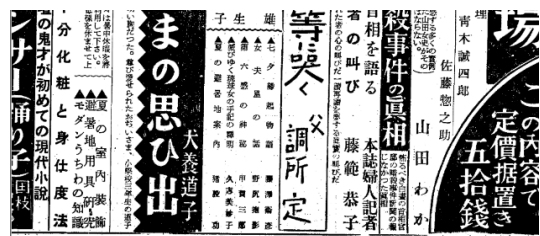
『読売新聞』1932年5月15日 夕刊



『読売新聞』1932年5月16日 朝刊



『読売新聞』1932年5月19日 夕刊



『読売新聞』1932年6月15日 朝刊

この他にも、『婦人公論』1932年6月号に掲載された「滅びゆく琉球女の手記」の初出のコピー、また、同年7月号の目次、奥付と「釈明文」のコピーを沖縄国際大学図書館を通して天理大学図書館より取り寄せてもらった。初出のコピ

ーは県内の図書館ではできなかったので、図書館サービスを通して改めて原資料のコピーに当たることができた。

修士論文の執筆において、上記の文献以外に、ぜひ収集したいと考えていたものは、仲村顕氏が2020年11月28日に、「比嘉春潮賞」を受賞した際に行った講演資料の中に記載されていた、これまでの先行研究では触れられていない資料(仲村氏によって発見された資料)である。

- ① 久志芙沙子の父親である久志助保の会葬御礼(『琉球新報』1915年2月10日付?)
- ② 『臺灣日日新報』(新聞)の1926年11月30日に掲載された“安良城ふさ”名義の短歌二首(この二首以外にも投稿されているのでは?)
- ③ 『おきなほ』という雑誌の1914年6号に掲載された“久志ツル”名義の作文「わたくしの家」

コロナ禍で、県内図書館の休館が続き、資料収集にはかなり時間がかかった。①については、沖縄県立図書館にて当該年月日の号を確認したが、該当する記事が見つからず、雑誌『おきなほ』6号と『臺灣日日新報』のについては、沖縄県立図書館では収集されていないことから、調査が難航することとなった。

2.2. レファレンスサービス利用の概要

修士論文に必要な文献を収集するため、報告者がレファレンスサービスを利用した図書館は次の2カ所である。

- 沖縄県立図書館: 2021年10月14日(木)13時45分~14時(約15分)
- 沖縄国際大学図書館: 2021年10月21日(木)14時~16時(約2時間)

①の文献については、沖縄県立図書館でのレファレンスサービスを利用して発見することができた。筆者が1人で調査を行った際には見つかることができなかったのだが、父が亡くなったのは2月9日であるために、会葬御礼は10日に

掲載されていたと思い込んでいたことがその原因であった。レファレンス担当者に問い合わせたところ、調査範囲を前後に広げて、2月11日に該当する記事を見つけてくれた。利用者の情報をうのみにせず、周辺の情報にも目を向けている点に専門性を感じるようになった。こうして入手することができた、1915年2月11日の『琉球新報』の記事には、久志芙沙子が喪主としての役割を果たしていたことが確認できた

②については、県立図書館には所蔵されていなかったが、『臺灣日日新報』のマイクロフィルム版が沖縄国際大学図書館に所蔵されていることが後日わかったため、レファレンスサービスを通して、仲村氏が発見した短歌二首と、それ以外の短歌の投稿がないか、調査を依頼することとした。

マイクロフィルム版の『臺灣日日新報』の調査は、図書館のレファレンス担当者2名とともに、地下2Fのマイクロフィルム室にて行った。



沖縄国際大学マイクロフィルム室での調査

仲村氏の資料によると、1926年11月30日付に掲載されているとのことであったが、1回目に当該日の記事を見たときにはどうしても、「安良城ふさ」名義の投稿を発見することができなかった。11月30日前後の1カ月間の記事も見えていったがどうしても見つからない。残念ながら、その日中には調査が完了しなかったため、後日回答として引き受けてもらったところ、1週間ほどして報告者のもとにメールが届き、11月30日付の「台日短歌」のコーナーに掲載された2首が発見されたことを無事に確認することができ

た。『臺灣日日新報』はマイクロ化する以前の原紙の保存状態が悪く、ページがところどころ欠けていたり、文字が小さく読みづらかったりして、見落としが生じてしまったようだ。その後も、「この二首以外にも投稿されているのでは？」という報告者の依頼にこたえるべく調査を粘り強く続けていただき、さらに1週間ほど経ってから、未発見の短歌として、次の三首が見つかったことをメールで教えていただいた。

片照りの白き階段にすゞりなく月の雫のかなし〇
〔1字不明〕民

大和町 芙佐子

1922年5月11日付『臺灣日日新報』「臺日歌壇」に掲載。19歳(大和町)の時の歌。欠字が一字あり、短歌の全体像はイメージし難いが、久志が台湾に嫁いだ直後の作品だと思われる。片側から灯がともる階段で、すすり泣いている作者の表情が感じられ、「月の雫のかなし」と、自身の胸の内を投影して詠んだ歌なのか。繁が誕生する前の歌である。何かつらいことがあったのだろうか。

泣き疲れねむりし吾子の枕べにすわりてをれば
心痛しも

安良城 芙沙子

1926年12月27日付『臺灣日日新報』「台日歌壇」に掲載。23歳の時に詠んだ歌。1922年19歳で結婚した久志は台北に移住。翌1923年に長男繁を出産している。吾子はおそらく繁ではないだろうか。この歌が詠まれたのは、繁3歳のころだと思われる。二首目の歌と兼ね合わせて考えれば、熱でも出して体調が悪く泣き疲れて寝むってしまったのだろうか。枕元で体調を心配しながら、見守っている作者の気持ちが感じられる。

病癒え汝が好むかの夜の街を父母と歩は如何
ならむ吾子

安良城 芙沙子

1926年12月27日付『臺灣日日新報』「台日歌壇」に掲載。筆名は「安良城芙沙子」。23歳の時の歌。病で臥せていた子どもが、やっと元気になり、親子で台湾の夜の街を散歩する。子どもは久しぶりの外出に心を弾ませている。3歳という可愛い盛りで、両親に手を引かれながら、目を左右に動かし街の様子に興味津々である。「如何ならむ」は吾子に問いかけているが、作者自身へ問いかける言葉でもあったのだろうか。繁は、新聞に短歌が掲載された50余日後、1927年2月19日に急性腸カタルで早逝する。3年余の命であった。

このうち、先に見つかった二首(12月27日付)については、沖縄国際大学大学院が発行する『地域文化論叢』第20号にて、「久志芙沙子の短歌二首発見」と題して掲載されることになった²。かなり時間のかかる調査であったと思われるが、沖縄国際大学図書館の職員の皆様にはチームで根気強く取り組んでいただき、報告者の修士論文でも新しい視点を得ることができたことに、心から感謝申し上げたい。

2.3. レファレンスサービスを利用しての感想

③の『おきなほ』については、古い時代の地域資料を多く所蔵する沖縄県立図書館のレファレンスサービスであっても、雑誌名に固有性がないためか、どうしても雑誌の存在そのものを調査することができなかった。

沖縄県立図書館では、『おきなほ』6号が刊行されたとされる時期に、『琉球教育』という雑誌があることを提示されたが、年度もタイトルも違うため閲覧はしなかった。しかし、『琉球教育』がどういう雑誌だったか、関連する情報や調査の手がかりが得られた可能性もあり、閲覧すべきだったと反省している。

沖縄国際大学図書館では、マイクロフィルムの調査を代行していただいたが、調査の範囲が広くなってしまい、他の業務に支障をきたしたので

² 宮里初枝「久志芙沙子の短歌二首発見」『地域文化

論叢』第20号, 2022.1, p.29

はないかとかなり申しわけなく感じた。マイクロフィルムの文字が小さく、報告者には年齢的なこともあってどうしても一人では読み取れなかったため、図書館の方がご厚意で調査を代行して下さいと思う。図書館では、利用者一人ひとりが置かれた状況を考慮してサービスを考えてくださっていることを実感し、図書館員の専門性に頭が下がる思いである。改めて心から感謝したい。

報告者は「沖縄」をテーマに研究しているが、久志美沙子については元々資料が少ない上に、手探りで収集したため、かなり難渋することになった。限られた時間の中、コロナ禍ということもあり、関係者への取材もできないまま論文執筆に入らざるを得なかったが、レファレンスサービスの利用を通して、いろいろな資料収集の方法があること、積極的にサービスを利用することの大切さを学んだ。

また、今回の活動を通して、沖縄国際大学図書館の素晴らしさに改めて認識した。大学院を修了した後も、一人の研究者としてももっと有意義に活用することができればと思う。一つ要望を言えば、地下1階にコピー機があると便利だと思う。地下1階には、貸出禁止の重量のある参考図書が多く、コピーのために階上に行くか階下に重たい資料を持って行かなければならないのは、年齢的にかなり大変であった。

もう1つの提案として、研究に必要な資料は、大学院生から要望があればできるだけ購入して欲しい。今回の活動を通して、リクエストサービスはあると聞いたが、多くの院生はその制度を知らないと思う。一人ひとりが気が付いたときに購入するよう要望すれば、後輩の研究にとっても有益だと思う。素晴らしい機能をもつ図書館をもっと

たくさんの研究者に知ってほしいと願う。

おわりに

今回の活動は、沖縄国際大学大学院(地域文化研究科)の授業「南島文学特論ⅡB」の一環として行ったものである。授業では、図書館の基本的な機能を学びながら、研究に必要な資料を図書館機能を活用して徹底的に収集しようと務めた。授業を終えて、授業担当者として感じることは、報告者の感想にもみられるように、「レファレンスサービス」という図書館の研究支援機能が、大学院生であってもあまり知られていないこと、あるいは、事前に調べたいことをメールで伝えておく、といった、上手にサービス活用する方法が理解されていない、ということである。

図書館機能を活用することで、報告者それぞれの修士論文の展開に新たな光が射し、研究が深まったようにも思う。調査時期は、いわゆる「第5波」が収まりつつある頃であり、それまでサービスが制約されていた分、本来のあるべき姿を取り戻したいという図書館の意欲も強く感じられた。

沖縄の図書館が持つ専門資料を生かした高いレベルでのサービスをどのように伝えていくか、今回の活動からみえてきた課題について今後も考えていきたい。

(構成:山口真也:沖縄国際大学)

なかそね あゆみ(1.)、みやざと はつえ(2.):
沖縄国際大学地域文化研究科